



## 3つの時代の 学校経験

金子 正徳 (かねこ まさのり)

本館機関研究員

### 調査の恩人、アリさんについて

ある男性の経験から、学校について考えてみよう。

彼は、熱帯に位置するスマトラ島の南端にあるランブロン州(インドネシア共和国)に住んでいるランブロン人である。ランブロン人は、いくつかの民族集団を総称する名称なので、もうすこし正確にいうと、プビアン人である。ランブロン人の村落における既婚者は、結婚時につける慣習称号を用いて互いをよび合う。彼の慣習称号は、スタン・プニンバン・プミ。最初の「スタン」の部分は、プビアン人

一八歳になったことでそれ以上の就学をあきらめたのだった。彼の学校経験はここで終わる。

### 学校経験と人びとのかたち

アリさんの学校経験は、学校というものが国家という制度と強く結びついていること、それゆえ、特定の社会的・政治的状況によって、教育の内容や意図、そして組織を大きく変えるものであることを改めて認識させてくれる。しかし、学校は単にそれぞれの国家における政治社会体制を推し進めるために個人を規範化する装置ではない。

前述の学校経験は、彼をはじめとする子どもたちが、慣習に基づく暮らしを送っている自分たちの村の外に広がる世界を、学校教育がもつ限界のなかで学び、それぞれの未来を思い計ったことを、改めて認識させてくれる。

フィールドで考えることは、アリさんをはじめとする多様な人びとの人生に絡み合う出来事と、強いつながりをもつ。彼の学校経験が秘めていたこんな想定外の事実や、個人的な経験を、統計的な数値や公的な記録から推し量ることはできない。こうして学校や国家などについて思考を巡らしたあとに、フィールドという場が縁があったそれぞれの方の人生へ関心はふたたび戻っていく。

日本へ行くのかと喜んでくれる人である。アリさんにはじめて出会ったのは二〇〇〇年二月だったから、すでに知り合ってから一〇年目に入ろうとしている。二〇〇〇年当時、彼は慣習に関する聞き取りのときにはよく同行してくれたものである。好奇心が強く、わたしをそっこのけで相手にさまざまな質問をしていたことを思い出す。予期しない話題の展開になったことで、調査を始めたばかりでよくわかっていなかったわたしが質問するよりもかえってさまざまな背景や事情がわかり、感謝することが多かった。また、そのような意味では調査の恩人である。

### アリさんの学校経験

アリさんはオランダ植民地時代、日本による占領統治時代、そしてインドネシア共和国時代という三つの時代に少年期をすごした。このため、小学校進学に關してだけでも興味深いエピソードがある。

まず、一九三七年に三年制の小学校へ入学した。オランダ植民地時代の小学校は義務ではないし、むしろ限られた人しか行けなかった。アリさんが幼児期に病気をし、右目の視力を失っていたことから、将来のために教育を受けさせたのだ。当時は全額個人負担だった教育にかかる費用を両親が捻出可能だったことも背景としてある。

当時は就学年齢が決まっておらず、腕を頭の上に回して、反対側の耳がつかめるかどうかで判断したという。このような体格を基準とするやり方だったことで、病気がちで小柄な子どもだったアリさんは、一〇歳になってから入学したのだ。そして一九三九年に、小学校を卒業した。進学しなかったのは、もう勉強したくなかったからではなく、当時のオランダ政府が、民族や人種を基準として進学を制限していたからであるという。音楽が好きだった彼は、オランダの王子誕生に際して小学校で教えられたという慶祝歌を今も覚えている。

ところが、一九四二年に、彼は再び小学校へと入学した。日本が第二次世界大戦において一九四二年から一九四五年にかけてインドネシアへ侵攻し、占領統治をおこなったことがきっかけである。日本はオランダとちがって民族や人種を基準として制限しなかったから勉強する可能性を感じたと、アリさんはいう。彼は今も、そのとき教えられた「君が代」を覚えていて、突然歌ってくれることがある。そして、時代を反映し、兵士に教わったという軍歌も。

一九四五年に日本は敗戦し、インドネシアから撤退する。一九四五年八月十七日に独立を宣言したインドネシア共和国のもとで、新しい小学校がひらかれた。アリさんは一年間通ったものの、すでに



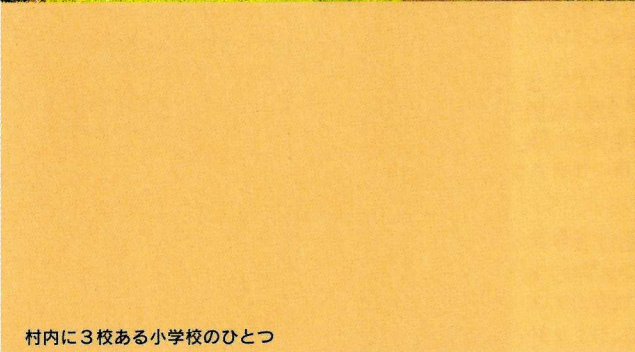
プビアン人の伝統家屋の一例(現在は激減)



村内の一風景



アリさんと筆者  
(Vivit Bartoven撮影)



村内に3校ある小学校のひとつ

